編集室から

夏の盛りは、８月だったはずですが、先月すでに連日猛暑日となり、我が国最高気温の記録も更新されてしまいました。

中東も４０度を超える地域ですが、乾燥しているため、思ったより過ごしやすいそうです。一方、湿度が高いこの国での体温超えは、ほとんど殺人的です。先日も３９度予報の中、急用で大阪に行ってまいりましたが、戸外に数分居るだけで汗が吹き出しました。水分補給にも気をつけましたが、今度は胃が疲れてしまったように感じます。

当初は「男なのに？」と思って躊躇していた日傘も、手放せなくなっていますが、習慣がないとは恐ろしいもので、手に持って出ること自体を忘れ、何度も悔しい思いをしています。日傘とネッククーラーは、これからの夏には必需品となってしまったようです。

熱中症予防対策も叫ばれていますが、未だに屋外運動を続ける教育施設があるのは、驚きで、夏の甲子園も事故が起きてしまう前に、そろそろ抜本的に考え直したほうが、良いのではないかと思ってしまいます。

地元の老舗海産物店に聞くと、海水温も上昇しているため、北海道の昆布漁にも影響が出ているそうです。量が減っただけでなく、品質も下がっているとのこと。ユネスコ無形文化遺産に登録されている和食にも、影を落としているとは、考えもしていませんでした。

転勤族の家庭に生まれ、故郷・幼馴染を持たない人間として育ったため、半農半漁の能登の田舎暮らしに憧れて婿入りし、自給自足の暮らしを満喫してきた我が身ですが、オイルショックの影響も受けなかった田舎でも、田畑の水やりが追いつかず、地球規模の気候変動には飲み込まれていくようで、呆然としています。

皆様、くれぐれもご自愛ください。（は）

明日裡雪

このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2025/08
(株)アスリック
http://www.neting.or.jp/usric

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話　076-233-7217
Fax　076-233-7375
Email　usric@neting.or.jp

2025/08
(株)アスリック
http://www.neting.or.jp/usric

葉　月

新しみず温泉 和歌山県有田川町にて
by hama

復興するぞ！
能登・北陸

寄稿『医療の常識・非常識～スティグマ：その①～』

サンポート高松クリニック　井垣　俊郎

スティグマという言葉を聞いたことがありますか？日本語に訳すと「負の烙印」です。例えば糖尿病の人はみな贅沢のしすぎや甘いものの食べすぎと決めつけてしまったり、過体重の人は自己摂生の出来ないだらしない性格だと見下してしまったりすることです。中には評価が当たらずとも遠からずという人もいるのでしょうが、十把一絡げにしてレッテルを貼られてしまうことで深く傷付く人もいることを忘れてはいけません。

◎

その典型的な例が、1型糖尿病です。完全にメカニズムがわかっている訳ではありませんが、糖尿病とは言いながら発症に食生活や体型はまったく関係していません。風邪をひいた時に原因となったウィルスを排除しようとして、誤って自分のインスリンを作る細胞も攻撃してしまうという説が最も有力です。先天性(生まれつき)というのも誤解です。日本人の1型糖尿病患者は、9割以上が身内に同じ病気の人がいない孤発例です。

◎

病気の治療法によって差別や不利益が生じる場合にも、このスティグマという言葉が使われます。例えばインスリン注射をしている人は、住宅ローンを組めないとか生命保険に入れないとかです。これを社会的スティグマと言います。しかしこれに対しては反論があって、インスリン注射をしている人は生命予後が悪いというデータが存在しているようです。根拠のない差別ではない、事実に基づいた判断なのだと。

◎

確かに過去においてインスリンは治療の最後の手段という色合いが濃く、当然ですが生命予後も良くありませんでした。しかし現代においてはインスリンの必要な方には早期から使用した方が良いと広く知られてきたので、治療法は大きく変わってきています。ただそれが結果の数字として現れるには、時間がかかります。その結果が出るまでは、インスリン注射が必要な方は悔しい思いをしなければなりません。我々医療者の責任は重大だと痛感させられます。

【プロフィール】（いがき　としお）金沢大学北溟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

濱の起業塾　七十六『リスク対策⑲』

今日、「経済」というと、概ね貨幣経済のことを指しているだろう。本来、経済の語は経世済民・経国済民の略語である。手許の辞書には「世の中を治め、人民の苦しみを救うこと」とある。

つまり、地域課題解決に資する事業も、経世済民の一環である。ところが、地域課題の解決は、政策レベルである経世よりも、対象・取るべき手段などが具体的であるが故に、意識はどうしても課題そのものの解決に向きやすく、地域全体の方向性や将来像との整合性は、二の次となる。これが長い目で見ると、竹がしなるように道を外れる原因となっていることに、現場では気づきにくい。

事故や災害などにより、人命救助など緊急に対処しなければならない事態に対するものが、対策。もう少し時間的猶予があるが解決しなければならない事態に対するものが問題解決型施策。

これらに対して、政策的に設定された地域の将来像・方向性と、現実や近未来予測との乖離を見出し、将来像・方向性へと近づけるものが、地域課題解決型施策である。つまり、政策・ビジョンが存在しなければ、解決すべき地域課題自体は現れない。

この点が見落とされがちで、先月号で指摘したように、事業を担う代替わりが進むほど、経世視点など何処へやら、となってしまいやすい。

例えば、地域ブランディングを見据え、綿密に検討されたマーケティングに従い、設定されたターゲットに刺さる事業開発・店舗設計・商品構成を展開した道の駅事業があったとしよう。開業前はもとより、開業後しばらくは、理念・店作りの方向性は、それらのビジョンに沿って進められていき、見事に狙いがヒットして驚くほどの成果を挙げた。ところが、社長・駅長が二代目・三代目と代わるに従い、それらは継承されずに、現場視点で「より売れる商品」「より儲かる商品」で店作りが進んでいくと、より早く陳腐化してしまい、核となるターゲットから見放されることで、急速に成績が落ちていく。それを挽回しようと、当初理念を忘れ、より「分かりやすい商品・店舗」づくりに励み、ますます事態を深刻化していくが、当の本人は構造的に何が悪いのか分からず、ひたすら間違った方向性を頑張ってしまう…。

大局的な視点の欠如が招くリスクは、深刻な結果と、回復の難度を上げてしまう。「経世済民を侮ることなかれ」と祈るばかりである。

きただより108　弘前大学　地域社会研究会　上村　康之
『 入院しての雑感 』

この６月14日、「脳出血」に襲われた。東北地方では「アダル」という。救急車で運ばれ、秋田市内の病院へ。即、入院となった。後日、主治医から説明がありMRIの結果を見ながら説明していただいた。場所は右脳。かなりまずい箇所であったが幸い浅かったとのこと。もし深ければ最悪のことも想定されたようだ。

最初の３日ほど集中治療室のようなところに入り、左腕は点滴、右腕は心電図と

身動きの取れない状態。トイレも看護師の方に入口まで連れていってもらう。その後、一般病棟に移り２週間。病室、病棟の外には出られない。窓から外を見るだけ。もちろん、外の暑さは全くわからない。出勤してくる方が「今日も暑い」といっていたが、病院の空調が効いていてむしろ、やや涼しいくらいであった。

さて、入院している患者にとって、一番接するのが看護師等の方々であり、感謝に堪えない。しかし、入院患者にもいろいろな方がいる。

看護師の言うことを聞かない。食事や服薬を拒否したりする高齢者の方。またベット及びベッド廻りの環境を変えたいと、看護師さんに作業してもらうが、気に合わないらしく、その看護師さんがいるときは「ありがとう」といいながら、いなくなってから「ブツブツ、ブツブツ」文句を垂れる。それぞれカーテンで仕切ってあるとはいえ、４人部屋のすべてに聞こえる。聞いていていいものではない。

同じように。ちょっとしたことで激高する患者もいる。ある時、看護師さんが私に「部屋を変えましょう」ということもあった。他の患者にも目を配る。

反対に私の隣の方は90歳であったが、とても親しみやすくお話の好きな方であり、看護師さんからも下の名前で話かけられていた。

その他、下の世話だけでも一日に何回、やるのだろうか。入院した側には、そんなことを考えている余裕はないにしろ、大変な業務であると改めて感じた。

６月30日、17日間の入院で退院することができた。今後、またお世話になることがあったとしても、よろしくお願いしたい所存である。

『 過疎集落が取り組む地域再生への道　05』
（一社）しろにし　理事　白川　晶也

私たちが、というより、地域事業者さんが取り組んできた「清水地域ランドスケープ再生戦略事業」では、能登から濱さんが、会津から矢部さんが毎月のように遠路はるばる和歌山まで来てくださいました。では、アドバイスを受ける事業者さん側は、口を開けて待っているだけだったのかと問われれば、決してそうではありません。

先月も「自主的な協議は100回を超えた」と紹介しましたが、他県の好事例を学ぶため、自ら日帰りで視察に足を運んだこともありました。当地域と同様に林業の村であり、また同じくふるさと財団の「地域再生マネージャー事業」を活用し、それをきっかけに地域自らが自走している岡山県西粟倉村、その中核をなす株式会社エーゼロ（グループ）さんです。廃校を活用している点でも共通項があり、弊社の主力事業として掲げている「地域の人事部」の名称も、実は西粟倉村雇用対策協議会（通称「村の人事部」）からヒントを得ました。

私はといえば、別の町内事業者さんとともに一足早く前日に現地入り。ちょうどそこに会いたかった方がいらっしゃったからです。それは、過去に当清水地域の案内をさせていただいたご縁で繋がった、株式会社ほんまもん代表の奥出一順さん。ちょうどそのころ、京都市最北端の集落・久多から一時的に拠点を移されていたんです。子どもや大人たちに「生きること」を伝える教育プログラム「いなか塾」を実践されていて、「こんな方がこの清水地域にいてくれたらなぁ…」と思い、今でも勝手に尊敬させていただいています（私には到底真似できないので）。

話は戻りますが、西粟倉村といえば百年の森構想に始まり、木材事業（森の学校）やローカルベンチャー育成、ジビエ活用などなど、当地域の参考になることばかり。地域の未来のため、今では高齢者福祉事業にまで領域を広げているほどです。ただ私、行政を介した視察はあまり好みではありません。行政担当者が同席すると遠慮されてしまって、現場の本音のところが聞けない気がして…。なので今回も、直接エーゼロさんに連絡を取り現地に伺いました。地域事業者のみなさんも、役場に行って会議室でお話を聞くのではなく、実際に挑戦し続けている方々に直接現場でお会いすることで、自身の心に火がついたのではないかと思います。そして、当事業もマネージャーのお二人を交えた議論を重ね、いよいよ目指す方向性が見え始めました。

『相模の国から　～大魔神のたび～　』人吉市への旅　2025.5.22～24 ②

茨城県境町 参与　溝口　久

（先月号からつづく）

旧国民宿舎をリノベーションした施設「まち•ひと•しごと総合交流会館 くまりば」（“球磨リバー”とかけている）を訪ねた。指定管理で運営されているこの場所は、コワーキングスペースや簡易宿泊所として再生され、温泉まで併設されている。以前、小山町のコミセンを改修した際、参考にした。内装のセンスや空間の使い方には今でも学ぶ点が多い。

この夜は、人吉旅館に宿泊。川のほとりにあるこの老舗旅館の被害はひどかった。１階天井まで浸水し、営業再開までに3年の歳月がかかったが、今では元の姿を取り戻し、趣ある佇まいと良質な温泉で訪れる人々を迎えている。大惨事からの復興には心底明るい「堀尾里美おかみ」の存在が大きかったかな。復興記録を見るとボランティアそしてクラウドファンディングによる募金の規模は女将の吸引力かな。

翌日は、「青井の杜国宝記念館」を観ることだ。国宝「青井阿蘇神社」の敷地内にある。国宝指定10周年記念に建設され、23年11月に完成した。設計は隈研吾氏。社務所、ミュージアム、地域の交流の場である畳の大広間を複合した参集殿がそれだ。

案内は神社に嫁に来た隅田節子さんだ。熊本県庁職員だったが人吉市役所に転職し、定年を待たずに退職したばかりだった。

茅葺きをイメージさせる木製のルーバーを用いた屋根、大屋根を支える柱が印象的だ。聞くところによると、この柱群は宮崎県狭野神社の狭野杉の樹齢４００年の倒木を用い、国宝の社殿とほぼ同年齢の大木だったとのこと。

続いて向かったのは「ひまわり亭」。そこでは旧知の岡本さん（熊本県庁OB）や、菊池市議会議員の古田さんが迎えてくれた。ひまわり亭も水害の被害を受け、かつての食堂と弁当製造の施設から研修を主体とした厨房、飲食スペースそして宿泊できる施設に変貌していた。節さん節は変わることなく地域のため人のためへ注ぐエネルギーをさらに加速させている。

3日目最終日は熊本空港に近い西原村へ。旧友の熊本県庁職員ＯＢの内田さんを訪ねる。氏は地元自治会で重責を担い、副町長も務めた。西原村は震災被害が大きかった地だ。地元神社の復原は往時のイメージを残しつつ、こだわりのデザインになっている。その結果なんと熊本アートポリス推進賞を受賞した。

最後に訪れたのが「オーディオ道場」。JBLの大型スピーカーから発せられた大音量のオフコースの曲が我々を包み込む。倉庫という大空間に響き渡る音の深さと厚みに、圧倒された。変なものがあるもんだ。もちろん変な人もね。

こうして、人吉と熊本をめぐる旅は終わりを迎えた。熊本空港の木質系の美しい内装デザインに見送られながら思うのであった。復興が進む人吉が、3年後にはどのように変貌しているか。もう一度、その歩みを見届けに来たいと。（了）